

はじめに

萱田の飯綱神社は、安政3年(1856)再建の壮麗な本殿や、神仏混淆だった特徴を示す鐘楼、天保3年(1832)再建の記録が残る石段などが残され、八千代市を代表する神社とあってよい。

江戸時代は、成田街道からの「いつな大権現」を指し示す道標が語るように、近隣はもとより遠方からの参詣者が絶えず、近代になっても「萱田市」や句会、「飯綱権現講」による「正・五・九」月のご祈祷も盛んだった。現代も初詣や秋の菊花展など市民が集いにぎわう名所となっている。

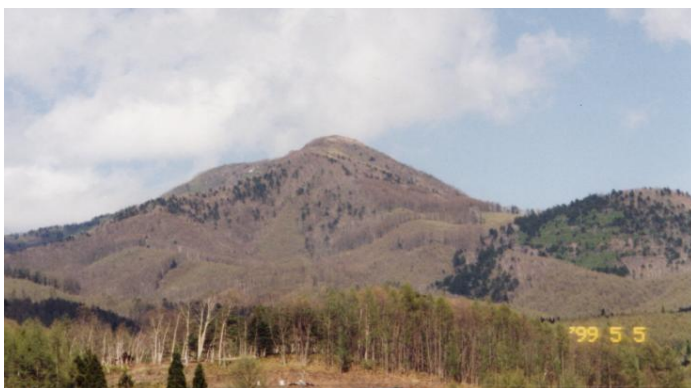
飯綱神社の創建は、この権現山に陣を張った太田道灌が戦勝祈願して埋めた十一面観音像を、約百四十年後の元和八年(1622) 白狐の神託により発見したという故事に由来するとされる。

筆者は、『史談八千代』24号(1999年)の「飯綱神社の由来とその伝承」で、「大和田町案内図 飯綱神社縁起」(昭和2年1927 飯綱神社社務所発行)に記載された萱田飯綱神社縁起を紹介した。そしてさらに、明治初年に飯山憲治氏が写した「飯綱神社ノ由来」を資料として紹介し、神仏分離以前の「飯綱大権現」信仰の姿を明らかにした。(『史談八千代』24号掲載の資料「飯綱神社ノ由来」に誤記があり訂正版を本号に掲載した)

また、飯綱神社奥宮を訪ねるため信州飯綱山を登頂したルポと共に、佐倉市吉見野田の小さな飯綱神社を紹介した。

その後、飯縄信仰の分布とその実態についてより知りたいと、本会員と共に、信州飯綱神社の里宮と戸隠に飯縄信仰のルーツを求めて探訪し、また文献資料を検索して飯縄信仰とそれに関連する文化財が残された関東各地の寺社や遺跡を調査した。

今回、萱田地域の総合調査の中で、関東縁辺や下総、さらに萱田の飯綱神社と関連して八千代市周辺に残された飯



縄信仰の姿を『史談八千代』24号の続報として報告できればと思う。

この報告は飯縄信仰をたずねる旅の紀行、姿を変えて今なお盛んな、あるいはもはや完全に忘れられつつあるさまざまな飯縄信仰の紹介である。

1 信州に飯縄信仰のルーツをたずねて

1999年10月29日、長野市に出張した日の夜遅く、長野郷土史研究会の小林一郎先生のお宅を訪問した。「飯綱修験の変遷」などをお書きになった小林計一郎先生とともに、ご子息の一郎先生もこの研究では第一人者でおられる。

小林一郎先生から文献の紹介と飯綱神社里宮への行き方を教えていただいた翌朝、さっそく戸隠行きのバスに乗った。善光寺の裏山の七曲を登りきった荒安で途中下車、たわわに実ったりんご畑の小道の先に里宮があった。全国の飯綱神社の元締だったというには意外にこじんまりした社と境内である。境内で清掃の奉仕をしておられた氏子の和田平治さんにお話しをお聞きする。



この里宮は、中世に飯綱山を開山以来、代々飯綱修験道を受け継いだ「千日太夫」の冬季居所として武田信玄が創建したとのこと。近世は朱印地百石の神領を有し、神社の隣に千日太夫の後継仁科氏の立派な屋敷があった。「善光寺名所図会」にも「飯縄の里宮・・・仁科氏の宅」が描かれているが、明治維新後、仁科氏の後継者は祀職をやめてこの地を去り、多くの文書もその屋敷や家財とともに散逸してしまい、そのため八千代市をはじめ各地の飯綱講や神社勧請の記録も残念ながらもう得られないことがわかった。

あとで縁起などの資料を送ってくださるとのお言葉に甘えて待っていると、後日家にりんごが1箱届いた。和田さん自ら収穫されたりんごに、「飯縄史研究会」の一員として飯綱山の史跡探査された記録のコピーと、現在と明治初期の里宮の由来書が添えられてあった。

神主が去った後も、皇足穂命神社となった飯綱山頂の本宮と里宮を守りつつ、りんごを育てこの寒冷な土地に暮らしておられる荒安の氏子の皆さま、そのおひとりである和田さんのご親切に感謝してりんごをおいしくいただいた。

荒安の里宮を辞して、戸隠に向かう。戸隠は若い頃スキーや登山によく通ったので土地勘はあったが、あらためて修験道の史跡や石仏などに注目してたずねるのは初めてだ。

宝光社、そして中社とまわり、中社手前右奥の境内で飯綱神の石像を探していると中年のご婦人に声をかけられた。津村信夫詩碑の前で写真を撮ってほしいとのこと。津村信夫ゆかりの安茂里の在の方で、快くファインダーを向けると、なんと詩碑の左、宣澄社の裏に、青面金剛と並んで2基の飯綱神像があるではないか。心して見ないとただの苔むした石仏だが、左向きの狐らしきものの上に剣と丸いものを持って立つ姿の背後には翼があり、火焰が一部欠けてはいるが、明らかに飯綱神の姿をしている。

早くから戸隠と飯綱の修験は深い関係があり、学問行者は飯綱山で7日間祈念して戸隠を開いたとも、飯綱大明神は戸隠の鎮守ともいわれてきた。飯縄信仰の方が早く広まり、戸隠修験も飯綱神を奉じていたらしい。近世中期以降は、九頭龍権現を水の神、農耕神として奉じ、また講の組織化も進んだ戸隠信仰の方が、秘法・邪法として埋れてしまった飯縄信仰に対して優位となった。探せば公明院などにもまだ飯綱神像があるそうだが、秋の山の冷気はことのほか早く迫ってきて、中社で知り合ったご婦人と下山するバス停へと急いだ。文学がお好きをいうご婦人に、今は珍しい露地の飯綱神像に巡り合えた感動をお話すると、大変興味を示され私もうれしかった。



そして、それから十年後の2010年6月11日～12日、八千代市郷土歴史研究会総勢28名で荒安の飯縄神社里宮を訪ね、戸隠修験の宿坊（今井旅館）に泊まり戸隠中社と奥社を巡拝することとなった。（この旅行記はP●●を参照のこと）

往路のバス車内では、菅野会員から「飯綱神社ノ由来」の原文解読の講義を受け、また牧野会長が旅の葉として作成された「飯縄山の信仰と飯縄権現」が配布された。後者は平成18年にいづな歴史ふれあい館が発刊した『特別展飯綱信仰』所載の高橋平明氏の報告の抜粋で、飯縄信仰研究の最新の成果が紹介されてある。

バスは快晴の飯綱高原を走り、荒安集落の入り口のバードライン路上に停まった。里宮へ畑の中の近道を行くと、懐かしい社殿が見えてきた。宮司の越志徳門師がご所用のことでご子息の禰宜の秀典師が迎えてくださる。越志徳門師は宝光社に宿坊を持ち、戸隠神社の役員を務められる神官で戸隠・飯縄に関する研究も発表されておられる方だ。「直接お話しできない代わりに」と氏が書かれた「飯綱山と飯縄信仰について」という小冊子をいただく。

御挨拶の後、禰宜の越志秀典師からお祓いを受ける。一般の神社での儀礼と異なるのは、太鼓を打ち鳴らしてあげられるリズムカルな祝詞。しばし湯殿山大日坊で体感したあの加持祈祷の法楽を彷彿とさせ、修験の極意を感じさせる時間であった。

鳥居前で禰宜さんと一緒に記念撮影。和田さんもご健在で懐かしいお顔を拝することができた。

里宮の鳥居から右へ行くと、「飯縄山大明神 本地延命地藏大菩薩」と大書された石標がある。その脇を入ると、夏草の茂る広場があり、草に埋もれるように坂東三十三観音や六地藏の石仏が並んでいる。ここは、「里宮の仁科氏の屋敷の傍らに、本地仏地藏菩薩（応安二年銘）を本尊とする地藏院があった」と小林計一郎氏が述べている寺堂（本地院）の跡であろうか。

ちなみに本地仏の地藏菩薩像は、その後流転の運命をたどり、現在は戸隠の公明院に祀られている。



夕方、中社に着く。鬱蒼たる社叢林に囲まれた社殿の右横では、宝物殿建築工事が始まっていたが、宣澄社の裏の飯縄権現像などの石仏は十年前と同じ姿で立っていて、会員の皆さんにもユニークなその姿を紹介することができた。中社では宿坊今井旅館に泊まる。かつての戸隠奥院金輪院、館主今井寿治師は神職でもあり、翌早朝は、かつて仏殿の名残を残す神殿で、飯綱神社里宮同様、法楽太鼓に合わせたお祓いを受け、朝食後、全員で新緑まぶしい戸隠奥宮まで行き、切り立った戸隠の霊峰を拝むことができた。

2 関東縁辺の飯縄信仰をたずねて

1. 西の守り、高尾山薬王院に登る

1999年11月3日、本会若手会員と一緒に、関東の西端に位置する標高599mの高尾山へ登った。薬師信仰の霊場だった高尾山に、永和元年（1375）醍醐山の俊源が入山し、飯縄権現を勧請してから関東一円の信仰の中心となり、戦国時代多くの武家の信仰を集めた山岳信仰の霊場である。また北武蔵の関門である小仏峠と甲州街道を眼下に望む要衝として、後北条氏は支城八王子城とともに、戦略上大きな役割を果たしていた。それだけに高尾山には、北条氏照・上杉謙信・太田資正ら主要な武将たちの寄進状・制



札などの古文書も多く、中世末期の関東めぐる勢力支配の状況を知る上で重要な史料となっている。

高尾山は近世に入ると、関東各地からの不動信仰の参詣客でにぎわい、特に寛永の頃は多くの立派な門や御堂が建設された。明治維新時も、神道ではなく仏門に徹した措置で廃仏毀釈をまぬがれ、現在もたいへんにぎわいである。歴史ある表参道の1号路をがんばって登ると、やがて八王子城の尾根が見える城見台を経て、薬王院境内の入り口に到り、修験道場の結界として「南無飯縄大権現」の石塔と浄心門が迎えてくれる。境内をよく見ると、小さな祠には飯縄権現が奉られていた。



本堂にお参りする前に、講の参拝客を接待する大本坊に寄ってみた。大きな講のにぎわいが今も続いている様子がわかる。お札所で入手した「武州高尾山御縁起文」と本尊「飯縄権現御影」、これを見ると近世の飯縄信仰の基本をなっていることがわかる。

縁起は「五相合体の飯縄大権現の本誓」を「一、火焰を負い剣と索を持てるは不動明王。二、歓喜天。三、くちばしと翼あるは迦桜羅天。四、白狐に乗るダキニ天。五、白蛇を頂くは宇賀神と弁財天」と表現し、それぞれの徳を授くと説いている。各地各寺社の飯縄信仰を集成したと思われるこの解釈は、近世わかりづらくなっていた飯縄信仰にひとつのガイドラインと示したと思う。「飯縄権現御影」も各地の飯縄神の姿の基本形となったと推測される。



江戸時代に建立された本堂・飯縄権現堂・奥の院を見学しながらいつしか頂上に達し、相模方面の山並みの展望を楽しむ。山頂の向こうは昔、富士講の人々が富士山遥拝のため通った奥高尾縦走路。色づき始めた紅葉の静かな山道をひたすら歩き、私達は小仏城山と称する城跡から落日へ映える相模湖へ一気に下りていった。

2. 津久井城跡に残る飯縄神社

2000年3月12日、高尾山を登ったメンバーで、八王子城・高尾山と並ぶ北条氏の防衛拠点であった相模の津久井城跡を探訪した。標高375mの山城で神奈川県立公園

になっている。鎌倉時代、津久井太郎次郎義胤が築城、その後、北条氏の内藤左近将監影定が城主となり、秀吉の北条攻めで落城し、廃城となった。現在でも、土塁・空堀・引橋・石垣石など残り、典型的な山城の遺構をとどめる。

都営地下鉄の始発駅本八幡から京王線の終点橋本まで直通電車で行き、バスで津久井湖観光センター下車、ここからハイキングコースとなる。1時間半の登り道で、山頂に着いた。山頂は東西二つに分かれ、東側の峰の飯縄曲輪には飯縄神社があった。西の峰には最高地点の送電線鉄塔の周りに米曲輪が残る。東西の峰の間は細い尾根で、堀切で隔てられている。

飯縄神社は小さな社であったが、ここからの眺望は特にすばらしく絶景であった。そして神社の脇に下記の銘文を記した「飯縄神社再建記念碑」が建っていて、麓の根小屋太井村の鎮守として現代まで祭祀が続けられていることがわかる。

「飯縄神社は祭神を日本武尊とし、建久八年（1197）当時の領主・築井太郎次郎義胤が城塞の守護神として創紀したものであります。天正十八年（1590）北條氏の没落により根小屋太井の鎮守として受け継がれ以後、氏子の手によって数次の修復や鳥居の奉獻などが行われてきました。昭和四十一年（1966）十月、台風禍にあい、本殿が倒壊したので多数崇敬者の寄進により新たに社殿を造営いたしました。ここに次第を記し長く後世に伝えようとするものであります。

昭和四十二年（1967）七月吉日建設委員 22 名
津久井町太井 津久井城址東丘山頂」

城主の館や家臣団屋敷など城山の中心部分は麓の旧津久井町域の根小屋地区にあり、城山は籠城と祭祀の目的として造営されていると推測される。西峰は戦闘と避難生活のための俗の場、東峰は戦勝祈願、そして決戦最期の聖なる場であったろうと思う。

北条氏が祀るその祭神は、やはり飯縄権現がふさわしい。祠を覗いてもその像などを見ることはできなかったが、外されて置いてあった社殿の一部の板には、天狗の団



扇のモチーフが刻まれてあった。飯縄曲輪は、かつて「天狗山」と呼ばれていたとのこと。山麓の村人、おそらく北条氏につき従っていた農民たちから、長く山の天狗として信仰されたのであろうか。

3. 東端の霊場 飯縄寺を訪ねる

2000年7月20日、太平洋を望む太東岬に近い岬町（現在のいすみ市）泉の明王山不動院飯縄寺と万喜城跡にある三光寺、大原町矢指戸の飯縄神社を同メンバーで訪ねた。

飯縄寺は「天狗のお寺・おいづなさん」と古くから親しまれている天台宗の古刹で、「波の伊八」の彫刻でも有名である。修験道の寺とイメージしていたが、田園風景の中に茅葺の山門が迎えてくる親しみやすさは意外であった。訪ねた時は本堂の大修理が行われている最中であったが、本堂内の本尊お前立の飯縄権現像と、内陣と外陣との間の欄間に彫られた伊八の「天狗と牛若丸」「波と飛龍」を拝観することができた。

2010年の7月にも再訪、あいにくご住職はお留守でお話をお聞きすることができなかったが、平成12年10月15日落慶に際して発行された『千葉県指定有形文化財本堂保存修理工事 記念 飯縄寺』により、飯縄寺の歴史と飯縄信仰についての最新の研究成果を知ることができる。この資料によると、

縁起書では「元は満蔵寺と称したが、第九世豪什の代（16世紀末～17世紀初頭か）、太東岬に流れ着いた飯縄尊像を奉り、寺地を岬に移し飯縄寺と改称した」とあるが、天正18年（1590）に落城するまで万喜城の城主であった土岐氏が飯縄権現を信仰したことが大きな要因であるという。万喜城主は軍神としての利益に与ろうして飯縄権現を信仰し、その教法を担っていたのが満蔵寺の僧であった。寺が岬にあったころは、今とは異なり、修験道場に似つかわしい絶壁に波が寄せる荒々しい風景であったろう。

北条氏滅亡後の天正18年（1590）、徳川氏来攻に最後まで抗戦した万喜城が落城し



た。土岐氏が去った後、豪仕の後継の豪教は困苦して「不動尊之威徳」を安房から銚子浦まで広め各地の漁師の帰依を獲得、寛永7年（1630）に岬にあった堂宇を現在の里内に移し、本堂ほか鐘楼などの伽藍整備がなされた。遠方からの参詣者も多く、そして災害などの度にも再建や修理が続けられ、近世の寺社建築の粋を施した華麗な姿を今に伝えている。



近世の飯縄信仰に関して、江戸中期の勧化帳に記された「飯縄大権現略縁起」には、尊像の海中出現譚に加え「十三の大誓願」を記している。「十三の大誓願」は信州飯綱山の「飯縄大明神略縁起」に記されていて、各地の飯縄神の縁起にも流布している利益であるが、この寺では十三の誓をアレンジして「渡海安穩の誓約」を加え、難所である「太東岬の浦を行く船は、尊像に向かって礼帆を下げて通り、風波の難を遁れた」と特にその利益を語る。



「天狗と牛若丸」の伊八彫刻や、本堂の正面外壁に掲げられた大きな天狗の面など、天狗信仰も盛んであり、その由来の元は信州飯綱山の天狗である飯縄三郎であろうか。

また寛保3年（1743）「阿波神」を勧請しているが、阿波神は茨城県桜川村の大杉神社の祭神で、海上安全と病疫退散の効験をもち「あんばさま」として広く信仰され、その姿は、飯縄権現同様に天狗の像容をしている。このようにして、岬の飯縄寺は、西の高尾山と並び、戦国領主の庇護を失ってからも、庶民に親しみやすい飯縄信仰に姿を変え「天狗のお寺」として現在にいたっている。

4. 矢指戸の入り江に見つけた飯縄神社

太東岬より南方、いすみ市大原矢指戸の小さな入り江の奥の崖にも飯縄神社がある。千葉県神社名鑑によれば、祭神は「伊邪那岐命・伊邪那美命」となっている。本殿欄間に「嶋村光晴作」と刻銘された「天狗と牛若丸」、拝殿向拝に「竜神」彫刻がある。大原小沢宮之台諏訪神社にも「彫工 島村光晴 二十七才昭和十年」の銘が残されているので、昭和になってからの彫刻であろう。なお、鳥居には「大正八年（1919）正月吉日」銘がある。

「矢指戸は戦国末期に徳川から追われた武士のいわば落人村で、その武将が万喜城

落城の際、城に奉ってあった本尊を背負い落ち延び、当地に奉ったもの。ちなみにその本尊は白狐の木像と言われている。」という一説もあるようだ。

なお、万喜城内の三光寺には、室町時代の飯縄権現像と愛宕権現像が残されている。2010年7月いすみ市郷土資料館をたずねると、ちょうど企画展「万喜城～城からみたいすみの戦国時代～」が開催されていて、三光寺の飯縄権現像の写真が展示されていた。また古地図による最近の研究では、城跡内にある三光寺と妙見堂は、寛政のころ現在の場所へ移されたとのことで、それ以前は、主郭の外の山深い場所にあっただらしいとのことである。



5. 茨城県「あたご天狗の森」の飯綱神社

秋晴れの1999年10月11日、岩間の愛宕山に車で登り、奥社となっている飯綱神社を訪ねた。愛宕山は昔岩間山と呼ばれ、石岡市の境界の吾国山～難台山へと続く標高305mの山で、徳一大師が開山した密教系修験道の霊山とされる。その山上からの眺めはすばらしく、現在「あたご天狗の森」公園となっている。

山頂には、火防の神といわれる愛宕神社、その奥の石段を登ると奥社である飯綱神社、さらにその上に御奉殿と称する銅製の六角形の堂があり、飯綱神社の本宮という。この後ろを囲むように並ぶ石祠が、十三天狗の祠だそう。この十三天狗の民間伝承については、平田篤胤の「仙境異聞」に書かれている。

飯綱神社では、毎年旧暦11月14日、愛宕山麓の五霊地区の人たちによって「日本三大奇祭の一つ」という「悪態祭り」が行われる。13人の氏子が白装束に烏帽子姿で天狗の格好をし、十三天狗の祠にお供え物をしてまわるが、そのとき沿道の一般参加者が天狗に罵詈雑言を浴びせかけ、天狗に邪魔されながら供物を奪い合うという祭りで、供物を奪い取った人には御利益があるという。昔は水垢離して天狗の面を付け、真夜中から行われる神聖な祭りであったが、現在は安全上、昼間に面無しで行われて



いる。

現在も十三天狗の伝説とその祭りで地域はエキサイトしているが、この飯綱神社の祭神を『神社名鑑』では手力雄命とし、また延喜式の夷針神社を当てているものの、神社名本来の飯綱神の由来について、また本宮とされる六角堂についても、確たる謂れがほとんどわからなくなっている。

また、峰続きの難台山には城跡があり、南朝方の小田五郎藤綱が佐竹氏に包囲され落城したというが、戦国時代のその後の攻防史は不明である。

常陸の山々は、関東でも特に修験道が盛んな地であったが、江戸後期からの過激な水戸学とそれによる藩の敬神排仏の宗教政策で、この地の中世以来の修験信仰の実態は全く不明になっていると感じられる。そんな中、この地に幕末、天狗党が跋扈した。時代変革の嵐の中、賞賛と罵詈雑言の声を浴びながら志を抱き疾走する彼らの名に、この地のフォークロアがもつ「天狗」観とそのイメージがうかんでくる気がした。

4 下総に飯縄信仰の残照を探る

1. 松戸市旭町の金蔵院の本尊飯縄不動尊

松戸七福神の「恵比寿神」が祀られている旭町の金蔵院は飯綱不動尊が本尊と知り、2010年8月25日、田村・吉野会員と金蔵院を訪ね、ご住職から由来などをお聞きした後、本尊を拝観し、また絵馬などを見せていただいた。

金蔵院発行の拝観の葉や境内の説明板によると、金蔵院は、真言宗豊山派の密教寺院で、寛永6年(1629年)に法印良慶和尚により開創された。江戸川の氾濫を鎮め、家内安全などの祈願寺として旧六新田の尊崇を集め、寛文年間には、故人を回向する菩提寺の歴史も始まっていたと推定される。本堂には本尊として飯綱不動尊が安置されている。



この本尊については、「飯綱不動尊ご帰院のこと」という伝説がある。「九郎左衛門新田(現旭町)の金蔵院には、飯綱不動尊という異形の不動尊がある。右手には剣、左手には縄を持ち、火焰を背負い、顔は天狗に似て二つの翼をもち、白狐を踏んまえている。文政のころ、恒例の御開帳をしようとして、見ると本尊様がない。やむなく代わりを作って本尊とした。その後三十年余、修験者奉賢が留守居となって同寺に住したが、茂左衛門ら村人と共に加持祈祷をするなどして旧本尊の帰院を祈っていた。その甲斐もあってか、文久元年夜半過ぎ、前夜のお告げによって終夜籠り祈っているとひどい震動とともに戸外で大きな音がした。とび出してみると、庭の榎の梢の地上二メートルぐらいのところに、不動尊がかかっていたという。不動尊の無事の帰院と

靈妙な神通力に驚嘆した話は、文書として残されている。」

栞の「金蔵密院の飯綱不動尊」には、次のような考察が記されている。「飯綱不動尊をご本尊として開基良慶和尚が勧請されたのは、金蔵院の位置する六新田（現六和地区）成立に功のあった旧高城氏家臣団が関係するものと思われる。高城氏は、小田原北条方の武将であり、かの北条氏は八王子に高尾山薬王院を中心とする迦葉山（群馬）、古峰ヶ原（栃木）、道了尊（小田原）の四山天狗信仰を手厚く保護した。当地にも根強い飯綱信仰があったものと推測される。」

また「飯綱不動尊のお姿は、一体五相を示す」として、高尾山の縁起「五相合体の飯縄大権現の本誓」と同一の五つの利益を説いている。

客殿には、「飯綱不動尊ご帰院」の奇譚を描いた文久元年の絵馬や、江戸時代の作と思われる「弁慶と牛若丸」の絵馬が架かっていて、庶民の信仰が篤かったことがうかがえた。最後に拝見させていただいた飯綱不動尊像は、真横を向いた白狐に乗る堂々たる像で、近世の飯綱神の像容を今に伝える貴重な彫像であった。

なお、流山市内の東福寺にも江戸時代の飯綱権現立像があり、『流山の仏像』に載っているその写真を見ると、金蔵院本尊と極めて類似した像容であった。守龍山東福寺には、「鱒ヶ崎」の地名の由来となった竜と霊仏の出現伝説がある。東福寺の飯綱権現像も、小金城主高城氏の飯縄信仰に関連する彫像なのであろうか。

2. 千葉市若葉区大宮町大宮神社に残された旧長峰村元飯綱神社の石造物

本保弘文氏のホームページ「房総史譚」に、「千葉大宮巡り 字上和田の飯綱神社跡に残る石仏」という記事を見つけ、2010年7月30日、早速、現地に行ってみた。

記事では、千葉市若葉区大宮町 624 に元飯綱神社があった跡があり、かすかに神社があったという景観と嘉永四年（1851）銘の摩耗した石仏が残っている、また明治・大正期の『県神社明細帳』（県総務部）には「所在地 長峰村字上和田（大宮町624



番地) 一. 祭神 保食神 一. 由緒 不詳 一.
社殿間数 四方一尺五寸 一. 境内坪数 三十六坪
一. 氏子戸数 十戸」、また村社大宮神社の項に、「明
治四十四年(1969)六月二十三日、同所上和田無格
社飯綱神社を合祀す」と記されているとのこと。

大宮神社の境内をよく調べると、本殿の左の石祠群
に「飯綱神社」の石標と、「保食神」の石祠があった。
おそらく上和田の小さな飯綱神社をここへ合祀する際
に運んできた石標と石祠であろう。



飯綱神社が鎮座していたという場所は、都川とその
支川の分岐点に突き出した大宮町の台地(旧長峰村=
現在の千城台地)の西先端部で、中世城郭「城の腰城」跡がその南側に隣接している。
城の腰城近辺は 1555 年~1571 年、上杉軍に呼応して原氏の拠点臼井城を攻撃した里
見・本木軍との戦いの前線の要所であった。また「長峰」は、最近の研究(黒田基樹
「戦国時代の千葉氏御一家」2010 年 6 月 26 日講演録)で、千葉宗家が平山から本佐
倉へその拠点を移転する際の中継点とも考えられている。(「千葉市の遺跡を歩く会」
ホームページ)

飯縄信仰の遺跡として小さな発見であったが、現地を歩いてみて、萱田の飯綱神社
の伝承とその時代状況と立地が密接に共通しているのではないかと思った。

3. 飯綱権現像が祀られている四街道市物井の不動堂

物井地区の千代田公民館に接して、「御山の不動堂」が静かなたたずまいを見せてい
る。初めてこの境内を訪ねたのは 1998 年 2 月の寒い頃であった。空っ風に土ぼこり
が舞う中、周辺では大規模なニュータ
ウン造成が進行中であった。

この御山の不動堂は、旧金剛寺の境
内堂で、江戸時代後期の仏殿建築物と
して、四街道市の指定文化財になって
いる。

不動堂の須弥壇には制叱迦童子、矜
羯羅童子を従えた本尊の不動明王が祀
られ、その左後に「木造飯綱権現立像」
が安置されている。二童子像と飯綱権
現像の 3 体も、四街道市の文化財に指
定されている。



この飯綱権現像について、『四街道市の文化財』22号では、調査前は破損が著しく、台座と分離されて放置され、左腕や右翼は欠損消滅、原形を知ることが困難な状態であったという。またこの像が不動三尊と同一場所にあるのは不自然で、境内に飯綱権現堂があったと推定している。

不動堂の右横に小さな仮堂があり、秋葉権現像、阿弥陀如来像、胎蔵界大日如来像の3軀の石仏が安置されている。また境内には、「天和二年」（1682）、「下総国臼井庄物井金剛寺住定伝」の銘が刻まれた光明真言五十万遍誦誦塔などが残されているが、この銘にある「物井金剛寺」なる寺院は、明治4年（1871）の廃仏毀釈と明治6年（1873）の修験道の禁止で廃寺となり、現在は不動堂とその境内は、天照皇大神社の所管になっている。

金剛寺や飯綱権現像については、長い間不明であったが、同じ物井地区にある円福寺に残された旧金剛寺の遺物や「桜井家文書」、平成8年（1996）の四街道市の調査で、その概要が明らかになってきている。

・金剛寺について：金剛寺は金石文から、室町時代中期初頭も康正年中から文明年中（1455～1486）ごろに開山された密界道場で、菩提山弘覚院金剛寺を号した古刹である。

金剛寺開山中の「御山」（山号を含めた一山に対する敬称）は、12万㎡に及び、そのうち境内は3万4千㎡で、客殿・庫裏、不動堂、権現堂・権現池・修業道場などがあつた。江戸初期（1615～1643）に新義真言宗智山派に属し、檀家制度による祈願所になり、寛永4年（1640）には、出羽三山の神霊を勧請。徳川秀忠正室や京都所司代板倉重宗などの寄進で各種権現を造営、出羽三山信仰の拠点となった。

・飯綱権現像について：物井不動堂の飯綱権現像は檜材の寄木造りの立像で、権現像本体82cmが岩座の上の白狐の上に立ち、高さ41.5cmの火焰光背が付くのでかなり大きい。「物井村 金剛寺住 清鑊（鑊は梵字のバンを代用） 元禄五年（1692）甲ノ九月 敬白）の胎内墨書銘が見つかっている。

また金剛寺の宿坊だった円福寺が金剛寺から引き取った什宝類の中に、護符の版木が多数残され、そのうちに「行基菩薩御化 物井村 菩提山金剛寺」の刻銘と精緻な飯綱権現像の図像が刻された1枚がある。飯綱権現の像容をよく表す図像なので、その特徴を転載する。

「火焰光を背に、左右の背上に二枚の翼を付け、頭上に白蛇が巻く螺髪であり、弁髪は左肩にかかり、面門は水波の相、両眼は大きく開く忿怒の相、胸には胸飾をつけ、



右手に宝剣を執り、左手に羂索を持し、岩座上に五鈷杵を啜えて疾駆する白狐の背の上に敷かれた青蓮華の上に半身の構えで立ち、白狐の尾は後方に高く上げ、その先端に宝珠を載せている。」

金剛寺における飯綱権現の位置付けは、桜井家文書の安政 6 年 (1859) の「権現山湯殿山供養役割帳」で、「当権現湯殿山大日如来月山羽黒山大権現地主飯綱大権現其の外数社勧請これ有る処、年来六月八日、池払いの為、行人衆相集まり祈念仕り候・・・」とあり、寛永 17 年 (1640) に出羽三山の神霊を勧請する以前、飯綱権現はすでに「地主飯綱大権現」と認識され、他の諸権現像の代表格として祀られていたようである。

また、『下総国旧事考』(清宮秀堅・江戸後期)によれば、物井村については、次のように記されている。「物部郷、今印旛郡ニ物井村アリ、是レナルベシ。・・・長岡・和良比・亀崎・野田・飯郷・飯郷ハ井郷ト云ウコトニテ物井郷の省ナルベシ。此村ニ大宮権現ト云フアリ。飯縄権現ト云フモアリ。・・・」この時代、飯縄権現は物井村ではよく知られた尊像だったようである。ちなみに野田には『史談八千代』24 号で紹介した吉見の飯綱神社がある。

・物井と臼井城との関係：「千葉実録」に、「千葉氏二十二代孝胤千葉介、永正十八年 (1521) 辛巳八月十九日、六十三歳にて逝去・・・三男 右馬助。この人、印旛郡物井村に居住して物井殿という」とあり、物井殿は 15 世紀に物井村の古屋城に在城していた可能性が高い。

金剛寺の遺物に「寛永十七年庚申・・・下総国臼井庄内物部村金剛寺」と毛彫りされた金銅製の棟札が発見されている。また境内の墓石銘文調査や飯綱権現像胎内銘の僧の名前から、金剛寺は臼井の実蔵院の住僧と密接な関係があることがわかってきている。天正のころ (16 世紀後半) 臼井城主は千葉氏の宿老であった原胤栄で、実蔵院は原氏の戦勝祈願所として外護されていた。

またこの一帯は、文明 11 年 (1479) の太田道灌の臼井攻めの最前線になった地域で、上杉軍は物井の南方、南波佐間村と山梨村に布陣したという。金剛寺に飯縄信仰が伝わったのは、この頃であろうか。その後、臼井城主原氏の戦勝を祈願するための飯綱権現堂が、金剛寺と吉見野田に造立されたのではないかと私は推測する。



4. 白井市谷田の飯綱権現社を探して

北総鉄道沿いの深い森の中に、小さいながらも鳥居・灯籠・狛犬などが整った飯綱権現社がある。谷田の名主湯浅家が代々守護神とする神社で、ニュータウン事業により昭和 56 年この地に遷宮したことを記す記念碑が鳥居左に建てられている。

記念碑銘文

正面「昭和五十七年一月十五日／飯綱権現移転再建碑／元企業庁長 角坂仁忠」

裏 「飯綱権現縁起／願主千葉県印旛郡白井町谷田八五五／湯浅竜雄

当社は八千代市萱田飯綱神社の兄社に当ると言伝えられ当地の代々名主を勤める湯浅家の守護神として古くから祀られて来た



弘化三年湯浅七郎氏が石碑を建立 明治三十九年湯浅源治郎氏社殿を再建し
近隣の信仰厚く参詣者多きを数ふ 更に湯浅綱雄氏鳥居石段を寄進し境内を整備す
昭和五十六年千葉ニュータウン事業により遷宮することとなり湯浅竜雄氏当地に社殿を新築し祀りしものなり

昭和五十七年一月吉日 出浦久雄 文 書 (下段の工事関係者名などは省略)

2010年7月8日、湯浅竜雄氏のご子息の湯浅雅雄氏をお訪ねしてお聞きすると、社殿に祀られているのは、碑文にある弘化三年(1846)湯浅七郎氏が造立した石碑で、「飯綱権現」と刻字してあるとのこと。湯浅七郎氏は、江戸時代は七郎左衛門と名乗り、江戸末期の石造物や古文書にその名をとどめている。湯浅七郎左衛門家は、明治以後、源治郎氏、綱雄氏、竜雄氏と続き、昭和 56 年(1981)遷宮を行った竜雄氏は昭和 60 年(1985)に亡くなられ、雅雄氏が現在の当主である。

境内の明治期建立の石灯籠と手洗石には源治郎氏、昭和 15 年(1940)造の鳥居には綱雄氏、昭和 56 年の狛犬には龍雄(竜雄)氏の銘が刻まれている。

飯綱権現社が元あった場所については、現在社殿のある台地から谷津を挟んだ東側の舌状台地先端にあり、現在は北総鉄道の軌道内に位置すると丁寧にご説明いただいた。

屋敷内には飯綱権現信仰に関する資料はないようで、その由来も記念碑に記載してあること以上はわからなかったが、湯浅家は紀伊の中世前期武士団湯浅党の一部が、南北朝のころ足利軍の移動に伴って北総に移住してきた一族の流れをくみ、八千代市にもその一族で湯浅を苗字とする旧家が多いとのことである。

「萱田飯綱神社の兄社に当る」ということの由来は、「言伝え」という以上のことは

不明であったが、近世から近代への時代の変化、さらに現代の都市化の開発に際しても、飯綱権現信仰の祭祀が一族の守護神として絶えることなく伝えられている姿に驚きを禁じ得なかった。

5 おわりに

十年間の寺社や文化財、遺跡を探訪する調査で、飯縄信仰の広がりが甲信越だけでなく、関東の縁辺の山や下総の山林内にも残っていることをあらためて再発見できたと思う。

このように飯縄信仰が各地に残っているにもかかわらず、飯縄信仰の総元締めであった信州の飯綱神社里宮には、近世後期に仁科家が発行した「日本最初火防開運 飯縄山略縁起」を除き、江戸中期以降の飯縄信仰の様子を伝える史料がほとんど見つかっていない。

この「飯縄山略縁起」によれば、飯縄山大明神は、大戸之道神。本地は大日如来、不動明王の変相で、火防の神徳がある。衆生済度のため地蔵菩薩、武門擁護のため將軍地蔵となって現れる。天福元年（1233）開祖に山頂で以下の十三の神誓を述べられたという。

「第一 失火盜賊之難を遁る、 第二 主君之寵愛を得る、 第三 妻子眷属和合、 第四 虚名口舌を除く、 第五 戦場利息災、 第六 強敵降伏、 第七 除病延命、 第八 五穀一粒万倍、 第九 刀杖之難を遁る、 第十 福佑満足、 第十一 買売利潤、 第十二 子孫繁栄、 第十三 咒咀悪霊を除く」

なおこれより古い飯縄信仰を伝える史料「鹿児島県鳥帽子嶽神社飯綱大権現秘文」の誓願では、第九の「遁刀杖之難」が第一だった。この荒安里宮の近世後期の「飯縄山略縁起」も、上総の飯縄寺の誓願のように、この地その時代の庶民の願望に従ってご利益の順や内容を変化させていったらしい。

越志徳門宮司の御教示によると、江戸時代初期以降、千日太夫後継の飯綱神主の仁科氏は近世領主としての存在で、史料で見る限り、戸隠山頭光寺と飯綱山の領地をめぐる係争を繰り返しており、お札を含めて信仰に関する文書は、このほかほとんど目にしないとのことである。

正月の年占や護符を配り、江戸時代の各地の講を組織化し、戸隠山参拝登山を勧めていったのはもっぱら戸隠の宿坊の御師達であった。一方、飯綱神社について山頂の本宮と荒安の里宮を維持してきたのは、荒安地区の二十戸の氏子だけであり、特に明治初頭、仁科氏が去った後もこの地区だけでその祭祀を守り伝え、現在にいたっている。

萱田の飯綱神社をはじめ中世に遡る飯縄修験を伝える各地の寺社も、戦勝祈願した戦国城主の庇護を失い、また江戸時代に入ってから御師による組織的な布教もなかったが、高尾山や飯縄寺のように飯縄権現・飯綱不動尊の現世利益で庶民に信仰を広げ

た寺院もあり、またそれぞれムラの祭祀として維持され、明治維新の神仏分離を迎えた神社もあった。また廃寺となった物井の金剛寺のように、文化財としてその残照を伝えるだけのケースもある。

各地の飯縄神を祀る寺社が江戸時代の庶民の信仰を得たのは、かつて伝えられた「飯縄山略縁起」の十三神誓のうち、その時代に合った神徳、特に火防と五穀豊穡、除病延命、家内安全などの利益が多かったようである。

萱田の飯綱神社は、ムラの産土としてだけでなく、地域に講を組織し、家々に護符を配り、また市が定期的に立つ広域な地域センターとしての役割を持つことによって、近世の神仏習合の権現社から近代の神社への転換を果たしてきた。

なお、近世・近代の萱田の飯綱神社の経営について、また別当の長福寺に残された護符や、各地の飯縄神像の像容の違いと系譜に関する報告は次の機会に譲りたいと思う。

最後に、御教示いただいた長野郷土史研究会の小林一郎先生、飯綱神社里宮の宮司越志徳門師と御子息の越志秀典師、同里宮氏子の和田平治氏、松戸金蔵院の牛田秀浩師、白井市郷土資料館の高花宏行氏、白井市谷田の湯浅雅雄氏、および飯縄寺の資料をお送りいただいた郷土史家の久保木良先生に謝意を表します。

参考文献（文中紹介の小冊子を除く）

- 「飯綱神社」(『千葉縣千葉郡誌』千葉縣千葉郡教育会 1926年)
- 「飯綱信仰の歴史」小林一郎(『長野』第31号長野郷土史研究会 1970年)
- 「飯綱信仰とは何か」小林一郎・「飯縄山略縁起」小林計一郎(『長野』第109号 1983年)
- 「中世末の飯綱修験と飯綱権現像」高橋平明(『山岳修験』第9号日本山岳修験学会 1992年)
- 『特別展 飯綱信仰』(いづな歴史ふれあい館 2006年)
- 「高尾山史料集からみた薬王院有喜寺の歴史」村上直(『高尾山』大本山高尾山薬王院 1978年)
- 『四街道市の文化財』22号(1997年)四街道市教育委員会
- 『千葉県指定有形文化財 本堂保存修理工事 落慶記念 飯縄寺』(2000年)
- 『白井市石造物調査報告書』第4集(1989年)白井市教育委員会

参考サイト

- 「城ノ腰城(2) 推測：城ノ腰城はいかなる城か」<「千葉市の遺跡を歩く会」
http://chiba.fc2web.com/oomiya/oomiya_jonokoshijo2.html
- 「千葉大宮巡り(59) 字上和田の飯綱神社跡に残る石仏」<「房総史譚」
<http://bousou.txt-nifty.com/blog/2009/04/post-628a.html>